夏色誘惑アイランド

艶色母娘とビーチラブ

大泉りか
挿絵／相田麻希

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION

Contents

目次

第一章　美人女将の秘密 ―淫らな自慰行為― ……4
第二章　寂しい人妻の誘惑 ―露天風呂で不倫H― ……44
第三章　ウブ娘のバージンブレイク ―祭りの夜に― ……108
第四章　常夏奔放娘と純情少女、青姦H ―渚で3P― ……156
第五章　台風の夜の破廉恥同衾 ―熟色母と若艶娘を独り占め― ……229

登場人物 *Characters*

吉川 宣英
(よしかわ のりひで)

失恋の傷心を癒やすために、夏休みを利用して離島の民宿の住み込みバイトをする大学三年生の青年。

神尾 美波
(かみお みなみ)

民宿『さざなみ』の一人娘。活発ながら恥ずかしがり屋の純朴な少女。素潜りが得意。肉感豊かな身体は健康的に日焼けした小麦色をしている。

神尾 凪子
(かみお なぎこ)

美波の母で、民宿『さざなみ』を切り盛りする女将。三十六歳。しっとり濃厚な色気を持つ美人。夫は東京に出稼ぎに出ているため、欲求不満が溜まっている。

東原 ちえり
(ひがしばら ちえり)

東京に憧れる、天真爛漫で無防備なギャル風少女。美波の親友。明るい茶髪にこんがり焼けた肌、むっちりと若さ溢れる身体つきをしている。

第二章　寂しい人妻の誘惑 ―露天風呂で不倫H―

「ふっぁーあっ、眠い……」

目覚まし時計のアラーム音で目が覚めた。

時刻を見れば朝の六時。できればもうひと眠りしたい欲望に囚われながらも、布団から這い出る。

（こんな早起き、東京じゃ滅多にしないもんな……）

それだけでも眠いというのに、昨晩は目を閉じるたびに、瞼の裏に凪子の痴態が浮かび上がってきて悶々としてしまい、結局明け方まで眠りにつけなかった。

（挙句の果てに三回も自分でしちゃって、俺ってば恥ずかしいなぁ）

そのせいか、身体中がどんよりとだるい。

（今日はこれから仕事だってのに、気合入れていかないとな）

両頬を手のひらでぴしゃぴしゃと叩いて気分を奮わせると、布団から身体を起こした。

「おはようございますっ！」

手早く身なりを整えると、洗面所で洗顔を済ませてキッチンへと向かった。
味噌汁のいい匂いに鼻をひくつかせながら、大鍋を掻き回している凪子の背中に朝の挨拶をすると、凪子は手を止めて振り返った。
「おはよう、昨日はよく眠れたかしら？」
「あっ……はい。おかげさまで……」
真っ白に洗いざらしたシャツと活動的なデニムパンツに、エプロンという今朝の凪子の姿は家庭的な温かみに満ちていて、昨晩の淫猥な雰囲気など一かけらも漂っていない。そのギャップが逆にいやらしく思え、胸がどくんと高鳴った。下半身にたちまち血が流れ込んで、パンツをぐっと押し上げる。
（うわっ、朝からやばい……）
しかし、考えてはいけないと思えば思うほどに、昨晩の淫らな姿が脳裏に蘇ってくる。
「あのっ、何か、そのお手伝いすることありますでしょうか⁉」
妄想を掻き消すように声を張り上げると、凪子には、その様子がよほどに張り切っているように見えたらしく、くすりと笑った。
「そうね、じゃあ、そろそろ朝ごはんもできるから、美波を呼んできてもらえるかし

ら。ここの前の道を右手にちょっと行ったところに小さな浜があるの。岬の手前のあたり。そこで潜ってるはずだから」

「はい、わかりましたっ」

台所を後にすると、玄関へ回ってサンダルをつっかけ、民宿の前の道路へと出る。

今日も晴天だった。さすがは南国の島。まだ七時にもなっていないというのに、すでに太陽の光はきつく、肌を焦がすようにジリジリと焼き付けてくる。

アルファルトの照り返しを感じながら、歩道を右に向かって歩きだした。津波対策か、砂浜から五メートルほど高くなっている歩道のガードレール越しにはマリンブルーの大海原が広がり、ところどころに白いさざ波が立っている。

（うわぁ、気持ちいいなぁ）

日差しこそ強烈だが、まだ温まりきっていない朝の空気はかすかにひんやりとした湿気を持っていて、肌に心地よく清々しい。磯の匂いを感じながら、白い砂浜と澄んだ海とを見下ろして歩いていると、砂浜に黒い岩が混じるようになってきた。

やがて砂浜はわずかな幅を残して、ごつごつとした岩面が大部分を占める磯へと変わった。海面下の岩色を映してか、吸い込まれそうな紺碧色だ。やがて小さな入り江へとたどり着いた。

（この辺だと思うんだけど……美波ちゃん、どこかな）
こんもりと茂った岬の手前で立ち止まると、磯場に目を凝らす。
（あっ、あれかな）
きらきらと眩しい光を反射する海面に、ウエットスーツにゴーグルをした人影が見えた。他に人気はないので、おそらく美波に違いない。
「美波ちゃーん、朝ごはんだってー」
ガードレールのこちらから叫んでみたが、美波は気がつかない様子で、再び海へと潜ってしまった。
（ここから呼んでも、聞こえないみたいだな）
浜まで呼びにいくしかないかと、辺りを見回すとコンクリートで作られた階段を見つけた。歩道の隅に自転車を止めると階段を下りる。
「美波ちゃ……」
下の浜へ着くと、美波がちょうど海からあがってくるのが見えた。陸に手をついて、手の力だけで身体を持ち上げると、くるりと身体を回転させて尻から浜へとあがる。
美波は黒いウエットスーツを身につけていた。
（うわぁ。なんかエロいな……）

身体にぴっちりと張り付いたウエットスーツの濡れて光る鈍い光沢が、尻や胸の膨らみをより一層に映えさせていた。たっぷりと水分を含んだ髪の先から滴り落ちる水滴が、じっとりと這うように滴り落ちて身体を濡らしていく。

（美波ちゃんって……スタイルがいいんだな）

まるで、海の泡から生まれたアフロディテのような美しさに、思わず言葉を忘れて見惚れていると、美波は濡れた髪をさっと掻き上げて後ろへと流し、ウエットスーツの前チャックに手をかけた。

（あっ、脱ぐ……）

宣英の視線には気がつかないまま、美波はゆっくりとチャックを下ろしていった。

細い首から浮き出た鎖骨、そして魅惑的なカーブを描くバストが曝け出される。

（うわぁ、おっぱい大きいなぁ……）

こうしてみると伸びやかなスレンダー気味の身体だというのに、バストだけは不釣合いなほどたわわだ。

眼に眩しいほどの純白のビキニに包まれた豊かな膨らみは、男の宣英の手で持っても余るほどに大きく成長し、布地をはちきれんばかりに張り上げていた。

（凪子さんも、おっぱい、大きかったもんな……）

顔形がこれほど似ている凪子と美波だ。ビキニに包まれた美波のバストトップも、先晩見た凪子のそれと似通っているのだろうかと思わず妄想してしまう。

（お尻も……あんなに大きいんだ）

ウエットスーツを足から抜くために前かがみになると、むっちりとした尻が強調された。ぷりんと張り出して綺麗なハート型の膨らみに視線が釘付けになってしまう。

（身体は大人なんだな……）

尻から太もも、そしてふくらはぎへとスーツを降ろしていくたびに、下を向いているせいで重量感がさらに増したバストがふるふるっと揺れた。うっかりするとビキニからはみ出してしまいそうな危うげな膨らみに胸がどきどきと騒いでしまう。

見惚れている宣英の前で、美波はウエットスーツを足首まで降ろした。しかし、ぴたりと身体に沿った生地のせいか、なかなかスムーズに足首が抜けないようで、片足をついた状態で苦戦している。ようやく両足首がスーツから抜けたその時、大きな波が寄せてきて、美波の足元に降りかかった。

「きゃぁっ」

急な水しぶきで驚いたのか、美波がバランスを崩してその場に崩れ落ちた。

（危ないッ！！！）

「美波ちゃんっ！」
着替えをこっそりと覗いていたことも忘れ、反射的に飛び出した。間一髪、岩肌に叩き付けられる寸前に、美波の身体を宣英の腕が捉えた。
ぴちぴちとした素肌で、弾力がありつつも柔らかな小麦色の肢体が、すっぽりと宣英の腕の中に収まる。
（うわぁ……いい匂いだ）
濡れた髪の毛からは、船の中で嗅いだのと同じ甘酸っぱい南国の果実の匂いが強く立ち昇っていた。長く海水に浸かっていたであろう肌はひんやりと冷たく、内側からとくとくと鼓動している。
期待と、不安と、失恋の切なさとを抱きながら島へとやってきた、船中の気持ちがふと蘇ってきて、胸がきゅんと締め付けられ、美波の身体に回した手に思わず力が入る。
「……あ、あの、吉川さん、もう、わたし、大丈夫ですから」
戸惑うように睫を震わせて美波が宣英を見上げた。
「あっ、ご、ごめん！」
「いえ……あの……ありがとうございます。でも、宣英さん、なんでこんなところに？」

慌てて腕の力を抜くと、美波は、はにかんだ微笑を浮かべて首をかしげた。その拍子に白いビキニに包まれた豊満なバストがふるふるっと揺れて水滴が飛ぶ。
（近くで見ると、すごい迫力だ……）
細い二の腕と鎖骨の辺りは華奢なのに、お椀型のおっぱいはまるでメロンの実を半分に割ってつけたようなボリュームだ。こんなずっしりと大きな胸を細いビキニの紐だけで支えているかと思うと、ハラハラしてしまう。
バストを包む三角の布地は小さく、そこからぷにっとはみ出した下乳は、陽に焼けておらずに真っ白なのが妙になまめかしい。
（本当は凪子さんと同じく色白なんだな）
ビキニからはみ出したセクシーな日焼け跡に、水着をすべて剥ぎ取ってしまいたい欲望がこみ上げてくる。
「あの……、凪子さんが、そろそろ朝ごはんだから美波ちゃんを呼んでくるようにって……それで、俺、呼びにきたんだけど」
「あっ……ありがとうございます。じゃあ、家に……痛ッ」
踏み出そうとした美波が、その場に右足首を押さえてしゃがみこんだ。
「だ、大丈夫？」

「はい。ちょっと足首が……」
「どれ、見せて？　うん、血とかは出てないみたいだけど。痛む？」
「はい、ちょっとだけ」
「捻挫かな」
きゅっとくびれた足首に外傷は見つからない。どうやら、さっき波に足を取られた拍子に捻ってしまったようだ。
「歩ける？」
「はい。たぶん……」
とは言いながらも、右足首を庇いながら片足でひょこひょこと歩くさまはいかにも不自由そうだ。上道へとあがるためには階段も昇らなくてはいけない。
「ううん、ちょっと、無理そうだね。困ったなぁ……そうだ。俺がおぶってあげるよ」
「えっ、おぶるって……でも……」
「大丈夫。こう見えて、意外と力持ちだから」
本当は力になど、まるで自信などないが他に方法はない。
「荷物は？」
「そこのウエットスーツと、あと、そっちの網です。中に貝が入ってる」

「よし、じゃあ、ウエットスーツは美波ちゃんが背負ってもらってもいいかな。貝は……俺が持てるかな」
宣英はウエットスーツを傍らに置いてあったビニール地のバッグに入れた。ついでに岩の上に置いてあった着替えのタンクトップを美波に手渡す。
「……本当に迷惑をかけちゃってごめんなさい」
美波は決心したのか、宣英に手渡されたタンクトップを上から被った。
見事な胸の膨らみと谷間が隠れてしまい、残念な反面、太ももの付け根にギリギリの丈のタンクトップからチラチラとビキニパンツが見え隠れするのがパンチラのようで、妙に胸が騒いでしまう。
「はい、じゃあ、乗って」
「ごめんなさい。よろしくおねがいします」
そんな美波の姿に後ろ髪を引かれつつ、背中を向けてしゃがみ込んだ。ふわりとフルーティーな香りとともにぷにりと柔らかな物体が背中に当たる。
(やっべぇ、すごい密着度だ)
熱い息が耳たぶに当たってこそばゆい。むあっと噎せ返るような甘酸っぱい香りに、若い女の子独特のフェロモン臭が混じり合って、頭がくらくらしてくる。すべすべと

した太ももの手のひらにしっとりと吸い付くような感触が心地よい。
「あの……重たいですよね」
美波が申し訳なさそうに言った。
「ううん、軽い軽い。これなら全然大丈夫だよ」
本当に軽かった。正直なところ、美波をおぶって階段を昇りきれるかどうか、少し心配だったが、これならば大丈夫そうだ。
「つらくなったら言ってくださいね、わたし、いつでも自分で歩きますから」
「全然大丈夫だよ。上に行けば自転車があるから二人乗りで帰ろう……それにしてもすごいね、網の中の貝、全部美波ちゃんが採ったんでしょ？　尊敬しちゃうな」
「小さい頃からやってるから」
「俺なんて二十五メートル泳ぐのがやっと。潜水もできないし」
「じゃあ今度……泳ぎを教えてあげる」
「えっ⁉　本当？」
「うん。せっかく島に来てくれたんだから。潜ったら楽しいよ。いっぱい魚が見れるの」
「ありがとう。うれしいな。来た甲斐があったよ」

本当にこの島に来てよかったと思う。東京で実香のことを思ってどんよりと暮らすよりも百倍、楽しい刺激に満ち溢れている。

（癒やされるってこういうことを言うんだろうな……）

高くなってゆく太陽の光を全身に浴びながら、宣英は美波を抱える手に力を込めた。

美波の怪我は大したことがなかったようで、宿に着く頃には、ほとんど普通に歩けるようになっていて安心した。

凪子と協力して宿泊客たちの布団を片付け、朝食を各部屋に配膳し終えると、三人で台所横のダイニングテーブルで朝食をとった。

メニューは白飯に浅蜊（あさり）の味噌汁、生卵に納豆、そして美波が採ったサザエの刺身。宿泊客には敵わないが、それでも普段食べているコンビニのサンドイッチやおにぎりとは比べようがないほどに豪華で滋味深く感動的な味だった。

朝食が終わると、次は洗濯と掃除が待っていた。洗濯といっても、タオルにシーツに枕カバーと、洗うものは大量にある。すべてを干し終わると、凪子は各部屋の掃除機がけ、美波が廊下を雑巾で拭いている間、一番力のかかる布団干しを宣英が担当した。その後も、庭の雑草むしりをしたり、冷蔵庫にビールを補充したりとバタバタと

忙しく動き回り、一時を回った頃になって、ようやくひと段落がついた。
「疲れたでしょう？　たっぷり食べてね」
昼食は素麺だった。たっぷりとざるに盛られた素麺を、凪子がダイニングテーブルの上へと置いた。傍らには出汁つゆに葱や生姜や茗荷などの薬味類、そして鯵のたたきがある。美波と並んでいただきますの挨拶をすると、さっそく箸で素麺を掬い取った。
この島では鯵のたたきを素麺の薬味にするという。最初は恐々とつゆの中に入れたものの、食べてみると驚くほど美味しい。大満足の昼食が終わると、四時半までは自由時間でいいという。
せっかくなので、ビデオカメラを片手に少し島を散歩しようと思ったが、美味しいご飯でお腹がいっぱいになったら眠くなってしまった。昨晩はろくに寝れなかったのだから仕方がない。
（散策は……明日でいいか）
まだ二日目。この島で暮らす時間はまだたっぷりとひと月以上ある。昨日到着したばかりで、疲れがとれていないこともあるし、今日のところはおとなしく部屋で昼寝でもしようと決めて部屋へと戻った。

（そういや、働いている最中は、実香ちゃんのこと、全然思い出さなかったな……）
東京で、ことあるごとに思い出してメソメソしていたことを考えれば、ずいぶんの進歩だ。
（やっぱり環境を変えることって大切だな……）
畳の上に枕だけ置いて横になり、タオルケットをかけると自然とあくびが漏れた。目を閉じると、あっという間に眠りの中へと引き込まれてしまった。

目を覚ますと三時を少し過ぎたところだった。
もうひと眠りできないこともないが、あまり寝ても夜に差し障りがでる。眠気を振り払って起き上がると大きく伸びをした。
まだ頭はぼーっとするが、身体はだいぶ軽い。
（……そうだ、風呂でも入ろうかな）
午前中の労働でだいぶ汗を掻いた。どのみち、午後一番の仕事は男湯の掃除だ。風呂に入ったそのついでに掃除をすれば効率がいい。そう決めると、着替えを片手に部屋を出た。
階段を降り、『清掃中』の札を男湯の扉にかけると、脱衣所で衣類を脱いだ。誰も

いないことはわかっているが、なんとなくの癖でタオルで股間を隠して浴室へと向かう。

浴室は七畳ほどの広さで、ガラス窓に面した浴槽には、お湯がたっぷりと張られていた。その脇のガラス扉を開けると、露天風呂へと続いている。

（せっかくだから、露天に入るかな）

昨晩風呂に入った時は夜だったし、凪子の痴態を目撃したショックでそれどころじゃなかった。せっかくだから、今日は露天の方に浸ってみようと思い、軽く身体を流すと、ドアノブに手をかけた。

裸足で庭石を踏みながら竹製の囲いを回り込むと、石造りの和風な露天風呂が現れた。ひたひたに湯が張られた浴槽に足先から入ると、湯船から湯が溢れ出て、なんとも贅沢な気分だ。

「うわぁ、気持ちいい……」

肩まで湯に浸かると、思わずため息が漏れた。

湯質は透明ながらも少しぬるついていて、身体を芯からじんわりと温めていくようだった。露天風呂といえば、冬というイメージだが、こうして夏の昼間に浸かるのも悪くない。竹の垣根で目隠ししてあるとはいえども、時折、海からの潮風が吹き込ん

できて頬をくすぐり、火照りを冷ましてくれる。
「ふぁーっ、最高だなぁ」
仕事は忙しいとはいえ、飯は旨いし風呂は広い。おまけに一緒に働く女将はセクシーな美人で、その娘は素朴で愛くるしい美少女。これで日給をもらえるだなんて、なんだか申し訳ない気さえもしてくる。
（ここでひと月暮らせば、失恋の痛手もすっきり治るな……）
油断すると脳裏に蘇ってくる実香の面影を振り払うように、顔にじゃぶりとお湯をかけると、背後から声がした。
「あら、吉川くん？」
「あ、ああっ！　凪子さん⁉」
振り返ると、そこには、凪子が立っていた。
（し、しまった。ひょっとして俺、男湯と女湯と間違ってた⁉）
入る時にちゃんと確認したと思ったのだが、とんだうっかりミスだ。
「す、すみませんっ。俺、ここが男湯と勘違いしてて」
「あら、露天部分はひとつしかないの。日替わりで男湯と女湯とに切り替えてるんだけど……この時間は清掃中で入れないことになってるから、両方から入れちゃったの

ね」
「うわ、すみません、俺……」
「ううん、まぁせっかくだから、ゆっくり浸かりましょう。ね、隣いいかしら」
（えっ、隣って言われても、凪子さん、は、裸だし……）
風呂だから、当たり前といえば当たり前なのだが、しかし、凪子の格好はあまりに刺激的だった。胸の上から身体の前面に当てられた幅の細いタオルは、わずかな中心部のみをなんとか隠しているだけで、胸の脇部分や張り出した腰と尻、そしてむっちりとした太ももがはみ出てしまっている。丸みを帯びた肉体のカーブははっと息を飲むほどに女らしく、股間にぎゅわんと刺激が奔（はし）る。
（や、やばい……ちんちんが……勃っちゃったよ……よりによって、風呂で鉢合わせとかって……）
慌てて目をそらしたが、しかし、網膜には先ほど見た美人女将の肌もあらわな姿がはっきりと残っている。
（……ど、どうしよう）
風呂から退散しようにも、股間はすでにカチカチに勃起してしまっている。
「いや、す……すみませんっ！　ちょ、ちょっと温まったら、俺、内風呂に行きます

からっ」
「あら、いいのよ。広いんだから、ゆっくり浸かっていったらいいわ」
ドギマギ狼狽する宣英にまるでかまわぬ様子で、凪子は風呂の縁にすっとしゃがみ込むと、足先から宣英の左隣に滑り込んだ。
「はぁっ、気持ちいい。昼風呂って最高よね」
「あ……はい……いや……最高……ですよね」
凪子は気持ちよさそうに目を細めると、湯を掬って首筋を手のひらで優しく拭った。首筋に絡み付く結い髪に、細い鎖骨が色っぽい。湯水越しにはむっちりとした身体と揺蕩(たゆた)う陰毛までもがばっちりと見てとれる。
(や、やばい……もう、アソコがギンギンだし……こんなに近くに寄られると……収まるどころか……)
必死に別のことを考えて気を散らし、硬直をなだめようとするも、うっすらと脂肪をまとった滑らかな肩や細い首筋が気になって仕方がない。
(なんとか……勃起だけはバレないようにしないと……)
あまり近くに寄られては股間の屹立(きつりつ)に気がつかれてしまう。しかし、こんな間近に肌もあらわな凪子がいては、収まるものも収まらない。強張りを収めるのは諦め、せ

めても勃起を誤魔化すために、湯の中で股をぎゅっと閉めた。
「あらぁ、吉川くん、なんだか緊張してる？」
「あ……はい……その……女の人とふたりで風呂とか、初めてで……」
「やぁね。こんな田舎のおばさん相手に、照れることないじゃない」
あたふたと焦っている年下の学生をからかうように、凪子が悪戯っぽい笑みを浮かべた。
「いや、凪子さんは、おばさんなんかじゃ……その……全然、ないですし……」
「あら、だってわたし、もう三十六歳よ。君から見たら立派なおばさんじゃない」
「いや、凪子さんは、とっても綺麗でセクシーで……。だから、こんな状態、ちょっと……その……俺も男なんで、なんていうか」
「うふふ、そうね。ちょっと興奮、しちゃってるみたいね」
凪子は湯船へと目を落とすと、ふっと目を細めた。
（あ……うわ。バレてる？）
頬がかぁっと熱くなった。心臓の鼓動が一層高鳴り、ドクドクと脈動する。
「……ねぇ、吉川くんは、どうしてこの島に来たの？　ひと夏、アルバイトで潰しちゃ、勿体ないんじゃない？」

「いえ。いいんです、東京にいてもやることなんてないし……」
「またまたぁ。大学生でしょう？　夏なんだから、サークルの仲間と旅行とか、彼女とデートとか、いろいろあるでしょう？」
「いえ。実は……その、ちょっと恥ずかしいんですが、ここに来たのは、失恋が原因といいますか……彼女に二股かけられてた挙句に、振られちゃったんですよ。俺。ははは。かっこ悪いっすよね」
「あら、わたしったら……事情も知らないで、ごめんなさい」
笑い飛ばしてはみたものの、本当はまだ傷ついている宣英の心中が伝わったのか、凪子はふと真顔になった。自嘲する宣英の心の奥の痛みを推し測るように、ぎゅっと眉を寄せる、その悩ましげな表情が妙に色っぽく、ぞくっと胸が騒いでしまう。
（チンチン立たせながら失恋の話してるって、なんだか、ヘンだよな……）
心と身体がばらばらすぎる自分に呆れる思いだが、笑って話せるまでに傷が癒えたともいえる。だとすれば、この島に来たおかげだ。自分の選択に間違いはなかったと再確認していると、凪子が宣英の頬にそっと手を当てた。
「……凪子さん？」
「失恋したのね。それはつらかったでしょう」

「いえ、あのっ、大丈夫です。本当に、俺、まだ二日目なのに、ここに来てすごく元気になったんですよ。だから、ひと夏が終わる頃にはきっと、ぜーんぶ忘れちゃってると思います。なんだったら、新しい彼女が出来ちゃってたりして」

「……そうね、きっとこの島で忘れられるわ」

凪子が慈愛に満ちた眼差しを宣英に向けた。

（凪子さん、優しいなぁ。次に付き合うんだったら……凪子さんみたいな年上の女の人もいいかも）

優しく美しく、そして色っぽい年上の女。そんな女性と付き合うと、また違う人生が待っている気がする。

長い睫に彩られた凪子の瞳をじっと見つめ返すと、沈黙がふたりを包んだ。このまま、凪子の胸に飛び込んでしまおうか。そうすれば、完全に、完璧に実香のことを忘れられるのではないだろうか。

いや、しかし――凪子は人妻だ。さらに辛い道が待っていることはわかっている。

（でも、でも……こんな魅力的な女性を前にして、なにも手が出せないなんて、つらすぎる！）

「……さぁ、身体でも、洗おうかしら」

悶々と湧き上がるリビドーに耐えていると、ふたりの間の沈黙を破るように、凪子が、浴槽の縁に置かれたタオルを拾い上げて立ち上がった。ゆっくりした動作で風呂から出ると、洗い場へとゆっくり歩いていく。

（う、うわ。身体が……）

タオルで身体を隠しているとはいえ、濡れた生地が身体にぺっとりと張り付き、胸の膨らみはもちろんのこと、黒々とした陰毛まで透けてしまっていた。

（す、すごい、凪子さんの身体、いやらしすぎる……）

前面はタオルで覆っていたが、側面と後面を隠すものは何もない。少し肉の乗った背中、くびれたウエストに平たい腹、むっちりと盛り上がった大きめの尻と、女盛りの熟れた後ろ姿から目が離せない。

（……触ったら、柔らかいんだろうな）

ふるふるといかにも柔らかげに揺れる横乳と、もっちりとした尻肉。太ももの肉付きも立派で、その触り心地を想像するだけで、股間がずきずきと疼く。

（……どうしよう。あんまりじっと見てたら、変に思われるし……ますますちんちんも硬くなっちゃうし……）

凪子の身体から視線をそらすのは名残惜しく、かといって、見ていては、いつまで

たっても勃起は収まらない。もどかしい矛盾に心中を掻き乱されながら身悶えしていると、洗い場の椅子に腰を降ろしながら、ふとこちらに振り返った凪子と目が合った。
（うわっ、見てたのが、バレた！）
気まずさにうろたえながら、慌てて目をそらす宣英の耳に信じられない言葉が入ってきた。
「……ねぇ、吉川くん。背中、流してくれないかな」
「えっ？　せ、背中ですか？」
「そう。ダメかしら？」
「ダ、ダメだなんて、そんな……」
ごくんと喉が鳴る。凪子の身体に触れることができるだなんて……。
（で、でも、凪子さん……そんなことをしたら、俺、もう歯止めが利かなくなっちゃうかも……）
まだ戸惑いを拭いきれないでいる宣英に、凪子が上半身を捻って向き直った。
釣鐘形のボリューミーなバストが、宣英を誘うようにぷるんと揺れた。熟しきった女のシンボルだ。とたんに頭の奥がスパークして弾けた。
（う……わ……も、もう……知るもんか！）

情動に突き動かされるように立ち上がると肌もあらわな人妻のもとへと近寄った。
「じゃ、じゃあ、失礼して。その……背中を流させていただきますっ！」
凪子の背後に片膝をつくと、タオルにボディシャンプーをたっぷりと取って泡立て、真っ白な背中へと這わせる。
「うふふ。なんだか緊張してる？」
「いや……その……はい」
手がかすかに震えてしまっているのがバレてしまっているのか、凪子が笑いを堪えて言った。恥ずかしさと興奮とで、心臓を痛いほどに打ち鳴らしながら慎重に手を動かす。
（近くで見ても……凪子さんの身体、本当に綺麗だ）
染みも傷もひとつもない滑らかな背中のラインは、しなやかで優雅な曲線を描いている。うなじの生え際は綺麗な富士山型で、蒸気とともにむっとするような女臭が鼻をくすぐる。
（……いったい、凪子さん、なんのつもりなんだろう）
十八の娘がいる凪子から見れば、宣英などまだまだ子供のように思えるのかもしれない。けれど、宣英だって男だ。

（ひょっとして、俺のことを誘ってるってとか……ないよな）
それならば説明はつく。けれど――。
（うーっ、俺から行くとか、できないよ！）
情けないと言われても、ただでさえ失恋したての傷心の身。勢いに任せていったところで、もしも拒否されたら、傷に塩の上塗りだ。
「あぁ、気持ちいいわ」
と、肩の辺りに触れた時に凪子が声を漏らした。
「あ、ここですか。けっこう硬いですよね。凝ってるみたいです。ほら、この辺とか」
「ん、そこも……すごくいい……」
タオルを剥ぎ取り、直接、肩甲骨の骨の上を強めに押すと、凪子は気持ちよさげな声をあげた。そのまま、背骨に沿って親指で押していくと、尻の上の小さな窪みをきゅっと刺激する。
（うわぁ、凪子さんの肌、綺麗だなぁ……）
温泉で毎日磨かれているせいだろうか。真っ白な肌はキメ細かで、その肌触りはまるで上質のシルクを撫でているかのようだった。
「あんっ、吉川くんってマッサージ上手なのね」

「そうでもないですよ」
「んっ、ううん、すっごく……上手……ああっ！」
凪子の滑らかな肌に誘われるように指をずらしていくと、声がだんだんと荒くなっていった。まるであの時の声のようだ。
（ううっ、凪子さんの声、すごくエロい……）
ドキドキと胸を鳴らしながら、腰骨の辺りを両の手のひらで優しく撫でると、凪子がびくんと身体を震わせた。
「あっ、すみません、くすぐったかったですか？」
「ううん、そういうんじゃなくって……気持ちはいいんだけど……そこ弱いのよ」
「でも、ほら、ここの辺りも……凝ってるみたいですけど」
背後から手を回し、腰骨の上あたりを円を描くようにゆっくりと撫でると、凪子はこそばゆそうに身体を捻った。顎がくいっと上がり、だらしなく半開きに開いた唇から息が漏れる。
「あぅん、ダメだってばぁ」
「じゃあ……やめちゃいます……か？」
「……やめちゃダメ」

凪子が懇願と羞恥とが入り混じった潤んだ瞳で宣英を見上げた。
「それは、もっとして欲しいってこと……ですよね？」
「お願い……もう、これ以上は……言わせないで……そうよ、もっと……して欲しいの」
しつこいかと思ったが、しかし、恥じらいに頬を染めている人妻の表情は婀娜(あだ)っぽくて艶めかしい。もっと見たくてさらに執拗に問うと、凪子は真っ赤に染まった頬を両手で包み込んで瞼を伏せ小さく頷いた。
（やっぱり……凪子さん、俺のこと誘ってたんだ！）
ようやく確信を得られると、もう戸惑いの気持ちはなかった。
人のものであることは重々承知しているが、魅惑的に熟した色香溢れる女体を前にどうぞと投げ出されているのだ。断るには惜しすぎる熟れた裸体に、食いつかないわけにはいかない！
「凪子さんッ！」
人妻の身体を後ろから抱き締めると、耳元から石鹸の香りがぷんと香った。誘われるように首筋に唇を寄せると、凪子はびくんと身体を揺らす。
「本当に……本当にいいんですねっ⁉」

「恥ずかしいから……何も聞かないで……」
白く細い凪子の首筋に、ちゅっちゅっと音を立てて唇を這わせていくと、身体から力が抜けたのがわかった。腰骨の辺りを触っていた手先を腹からゆっくりと滑らせていくと、ぷにりと柔らかな触感に突き当たる。
（うわぁ、触るとこれまた大きい……）
見た目にもたっぷりとした胸の膨らみは触れてみると、想像以上のボリュームだった。
手に余るサイズというのはこのことだろう。宣英の手のひらで包み込むと、乳肉が指の間から溢れだしてしまうほどに柔らかだ。それでいて、ずっしりと持ち重りするのが手のひらに心地いい。
「すごい……凪子さんのおっぱい、柔らかくてすごく気持ちがいい……」
「あっ、あぁんっ……わたしも……吉川くんに揉み揉みされて……気持ちいいわ」
しっとりとした餅のような質感の、揉みごたえのある乳房を下から掬い上げては、たぷんたぷんと揺らし、波打つ柔肉の感触を楽しんでいると、火照った人妻は、くんと鼻を鳴らしキスをねだるように唇を寄せてきた。
「キスしたいんですか？」

「ええ、吉川くんのお口にキスがしたいの」
「凪子さん、すごく可愛い……」
甘えんぼの人妻に口づけると、ぷにりと蕩けそうに柔らかな唇が、宣英の唇へと当たる。
「ねぇ、お願い、舌も頂戴」
熱に浮かされたように囁く凪子の唇に舌を割り入れると、すぐさま差し込み返してきた。温かな舌粘膜が、ねっとりと宣英の舌に絡みつく。
（うわ、凪子さんのキス、情熱的だ……）
濡れた舌が宣英の歯茎から上顎までをねちょねちょとくすぐり、とろりとした唾液が流れ込んでくる。くちゅくちゅと淫らな音に催淫され、脳髄がじんじんと痺れていく。
実香と交わしたことのあるキスとはまるで別物の濃厚な接吻だ。
舌と舌とをねっとりと擦り合わせていると、だんだんと涎は粘りを持ち始めて、さらに舌同士の密着度を高めていく。
（大人の女の人って……積極的なんだな）
実香とのそれはまるでお遊戯のようなものだったと思わざるを得ない。口内性感の

すべてを刺激するような舌遣いや、絶妙な甘噛みの震えるような快感にくらくらと眩暈がするようだ。
しかも手の内では、絶妙な軟らかさを持ったボリューム満点の乳房が、ふるふると揺れている。
（凪子さんは……どんなエッチをするんだろう）
そう想像するだけで、ただでさえ屹立しきったペニスがまた一段力を持ち、下腹にくっつきそうに立ち上がる。早く次のステップへと進みたい。そう思う気持ちと、このまま、もう少し唇を合わせていたい、という思いとが悩ましく鬩ぎ合う。
「はぁ……気持ちいいのね、吉川くんのキス」
唇が離れると、凪子が吐息交じりにそう漏らした。
「そんな、凪子さんのキスのほうが凄いです。こんないやらしいキスしたの、俺、初めてですよ」
「いやだわ、恥ずかしい。わたしってば……でも、久しぶりだったから」
「そうなんですか？」
「そうよ。出稼ぎに行く前にうちの人としたきりだもの。そんなの、もう半年も前のことだわ」

「じゃあ、俺とするのが、半年ぶりのセックスになるんですね。でも……いいんですか。旦那さんがいるのに……」
「ダメよ。それ以上は言わないで頂戴」
言いかけた宣英の口を、凪子が唇で素早くふさいだ。唇が離れると、吐息がかかるほどの近さで宣英の目を覗き込み、首を横に振る。
「でも、俺、そんなに慣れてないし、旦那さんみたいに上手にできるか、自信があんまりないですけど……」
「いいのよ。吉川くんが、わたしを求めて、こんなふうにしてくれてるだけで嬉しいから。わたし、本当に……本当に寂しかったの。ダメな女よね」
「ダメでも……ダメでもいいです！　だって、旦那さんと別々に暮らして寂しくないわけがないじゃないですか！　俺でよかったら、凪子さんを慰めさせてくださいっ」
「吉川くん、優しいのね」
「あっ！」
凪子は宣英の股間に視線を落とすと、細い指先を伸ばした。ぐっと反り上がった陰茎に白魚のような指先がそっと触れる。その瞬間、足先から脳天までひりっと電流が奔り、カウパー液が先端からじわりと染み出してこぷりと盛り上がる。

「ねぇ、本当にこんなおばさんの相手をしてくれるの？」
「はいっ！　願ったり叶ったりですっ」
「嬉しいわ。ありがとう。じゃあ、お礼にたっぷり気持ちよくしてあげないとね」
「う……あっ……はいっ！」
男体に飢えた美人女将が指先で鈴口に溜まったカウパー液を掬い取ると、つーっと透明の糸が引いた。男液の先走りに、とろんと目を細めると、とろみを確かめるように親指と人差し指を擦り合わせる。
「もうこんなにしちゃって。吉川くんったら可愛いわ」
「だって……だって、凪子さんが、すごくいやらしいキスをするからですよ」
「キスだけじゃないわ。もっといやらしいこと、してあげる。君が今までされたことのないような……」
熟れた人妻は、洗い場の椅子から尻をずらすと、宣英に椅子を差し出した。誘われるがままに風呂椅子に腰を降ろした宣英の前に跪(ひざまず)くと、手のひらにボディソープをたっぷりと取り、宣英の下半身の中心に、堂々とそびえたつペニスをそっと握り締める。
「あ、あうっ」
柔らかな指の感触を感じた次の瞬間、ぬるりと滑り気を帯びた手のひらが、根元か

らゆっくりじっくりと亀頭に向かって上がっていった。
泡をたっぷりとまとった白い指先が肉棒を搦めとり、絶妙な力加減で刺激する。包皮を根元で押さえるように軽く添えられた左手は、さわさわと睾丸をまさぐり、むず痒いような快感が下腹にくすぶる。
「すごいわ、吉川くんのおちんちん、こんなにパンパンに膨れちゃって」
「あっ……あっ……あっ……凪子さん……っ」
凪子は清楚な作りの顔に淫猥な表情を浮かべては、男根の、その熱さや硬さを確かめるように手でシゴいていく。
（うわっ、す、すごい、手でされてるだけなのに、こんなに気持ちがいいだなんて）
これが年上の女性のテクニックというものだろうか。男の快感を知り尽くした人妻の指先は絶妙すぎる力の入れ具合だった。
シコシコと上下されるたびにペニス内に痺れるような愉悦が奔り、自然と唇から息が漏れてしまう。
しかもただ単調なだけではない。環にした親指と人差し指が、一番敏感な亀頭のクビレを通り過ぎる時にきゅっと半回転するのが、裏筋にビリビリと悦楽のアクセントを与える。睾丸全体を包み込んだ左手が、ピアノの協奏曲でも弾くかのようなリズム

で自由自在に揉み動くと、ぞわぞわとむず痒い快感に身体が弛緩する。
肌理の細かい泡の滑りも加わり、快感曲線は急カーブで上昇していく。
「うっ、ヤバいっす、ヤバいっすよ、凪子さん、そんなふうに触られたら、すぐにイっちゃいます」
「うふふ。吉川くんったら、敏感なのね。まだ手でしかしてあげていないのに、こんなにカチカチにしちゃって。ねぇ、こういうのはどうかしら」
凪子は妖艶な笑みを浮かべると、形のいい唇から舌をべろりと突き出した。そのまま、宣英の乳首をれろりと舐め上げる。
「あひゃっ」
今度は身体全体がびくんと激しく震えてしまった。
「うふ。女のコみたいな声を出しちゃって。可愛いわ」
「だって……あっ……ひゃうっ……ひゃはぁッ」
積極的な人妻は、右手で陰茎を手コキしながらも、ぬらぬらと濡れ光る舌を長く突き出してはれろれろと左の乳首を嬲(なぶ)る。ざらざらとした舌の表面が優しく乳首を撫でるたびに甘く痺れるような快刺激が奔る。
身体への刺激だけではなく、上目遣いで宣英の様子を窺いながら舌を使う凪子の表

情もまた刺激的だった。やや細められたセクシーな目つきに、溢れた涎が光る唇、ねっとりと動く長い舌と小さな八重歯。濡れた髪が首筋に張り付き、その白と黒のコントラストが眩しい。その下では、宣英の手のひらの中で大ぶりの乳房がたぷりたぷりと自由自在に形を変える。

「ぐぅっ、凪子さん、すごいっす……こんな……」

「まだまだよ。まだお口でもしてないんだから。ね、吉川くんのおちんちん、お口でさせて」

「あっ、うっ……はい」

ただでさえ発射寸前だというのに、この上、口でなどされてしまったら、射精に耐えきれるものか本当に自信がない。けれど、凪子の口技を味わってみたいという思いも強く、そのジレンマに身が引き裂かれそうだ。

「うふふ。こんなに大きくかっちかちにさせちゃって。お口の中に根元まで入るかしらね」

凪子は上半身を屈ませると、陰茎の付け根、睾丸とのすれすれのところに唇をむちゅっとつけた。半開きに開いた唇は涎で濡れていてぺとりと密着する。

「あっ……あひぃっ……」

「熱くてやけどしちゃいそう。それにすっごくドクドクいってる」
その温度と鼓動を確かめるように凪子は先端に向かい、唇を移動させていく。ねっとり、ぬめぬめとした唇の感触に、ぞわわと睾丸が震える。
唇が通り過ぎた後の陰茎は、てかてかと涎で濡れ光っていた。血管の浮き出た陰茎が照りを帯びて、まるで獰猛な海生物のようにも見える。しかし、奉仕好き人妻は、いとおしげに唇を寄せては、心を込めて接吻してくれる。
「ああっ、くぁわっ」
まだ口の中に入ってさえいないというのに、声が漏れて止まらない。
「おちんちんがびくびくって動いちゃって、可愛いわ」
亀頭のクビレまでたどり着くと、凪子はようやく唇から舌を出してちゅるりと一周舐め回した。ザラッとした舌触りが、快楽神経の集中しているクビレ部分を舐(ねぶ)り、強烈な快感を呼び起こす。
「お、お願いします。凪子さん……もっと、もっとしてくださいっ」
「うふふ。我慢できないの？　仕方ないわね」
淫らすぎる人妻は、鈴口にちゅっと唇をつけるとそのまま、ずぶりと陰茎を咥え込み、じりじりとめり込ませていった。温かな口内粘膜が陰茎をねっとりと包み込み、

温かでぬかるんだ至高の感触が肉竿を襲う。
「あ……すごい……凪子さんの口の中、気持ちいいです」
凪子の口内はとろとろに蕩けた生クリームのような柔らかな感触だった。それでいて、内頬が陰茎の表皮にべっとりと吸い付いて狭窄してくる。
「いっぱい味わってね、吉川くん」
ねっちょねっちょと卑猥な水音を響かせて、肉棒を咥え込んでいる凪子の顔には恍惚の表情が浮かんでいる。
(こんなに……こんなにちんちんを美味しそうにしゃぶってくれるだなんて)
テクニックはもちろんのこと、うっとりと色っぽい顔つきで、心の底から嬉しそうにペニスを咥える人妻の姿に、睾丸がきゅっと痺れるような興奮を感じる。
(けど……こんなふうにしゃぶられたら、あと何分持つか……)
きゅっと頬がへこむほどにすぼめた唇で宣英のペニスをずっぽりとくわえ込んだ凪子が頭を上下させるたび、陰毛まで垂れるほどの大量の唾が唇の端から溢れ落ちる。
痛いほどにカリが張り、精液が今にも溢れ出んばかりに陰茎を上昇する。気持ちいいのはいいが、このままでは、凪子の口の具合が良すぎてあっという間に達してしまいそうだ。

「あ。ダ……ダメです。凪子さん……本当に、俺、イっちゃいますから」
「いいわよ。このまま、お口の中に出して」
凪子が唇でカリ首をきゅっと押さえた。その締め付けに精子がぐぐっと迫り上がる。
（う……くぅっ！）
なんとか発射を堪えたものの、口内では硬く尖らせた舌べろが、おいでおいでとまるで誘うかのように鈴口をノックする。
「凪子さんっ……本当に、そんなふうにされたらイっちゃいます。まだ凪子さんを気持ちよくできてないのに……」
「大丈夫よ、吉川くんが気持ちよくなっているところが見たいんだもの」
「いや……そんな……」
「ね、お口でイって頂戴。君のザーメン、全部飲んであげるから」
吉川の劣情をさらに刺激するように、凪子は舌を長く伸ばすと、妖しい微笑みを浮かべ、見せつけるように肉棒を舐め上げた。
根元に添えられていた右手は、精子を導きだすように上下にしこしこと動き、ざらついた舌表面が亀頭にべっとりと張り付いて這い回る。精を吸い出すように鈴口をちゅーちゅーと吸われ、気がくるわんばかりの快感が精道を押し上げられてくる。

「あっ、あっ、あああっ。本当に……出ちゃいますから……」
汗ばんだ首筋に絡みつく黒い髪。響く淫猥な水音。甘い唾の匂い。噎せ返りそうな人妻フェロモンが蒸気に混じり合って頭がくらくらとする。みっともないが、このままでは達してしまうのも時間の問題だ。
（でも……口だけじゃ嫌だよ。ちゃんと凪子さんとひとつになりたいのに……）
しかし、凪子の口技から生み出される快感にこのまま浸っていたいのも事実だ。
「すごいわ、また硬くなったわ。まだまだ大きくなるかしら」
「う、ううっ……」
こんなふうにみっともない声をあげてしまい、恥ずかくてたまらない。しかし、そんな宣英のすべてを包み込むような温かな眼差しを送りながらも、凪子は舌を休めることなく、さらには絶妙なタッチではちきれんばかりの肉竿に細い指を滑らせる。
「ダメです……凪子さん、口じゃなくって……凪子さんに、俺、挿れたいのに……」
「うふふ。大丈夫よ。後でちゃんと挿れさせてあげるから……それに、一度、抜いておいたほうが、たっぷり楽しめるでしょう？」
「あ……うっ……でも、俺、女の人の口の中でイったことなんて……」
「あら、初めてなのね。嬉しいわ。大丈夫。気にしないで。思う存分、このまま出し

ていいのよ……ねっ？」
凪子はペニスをぐっと奥深くまで咥え込むと、じゅるじゅるっと吸い込んだ。
ディープスロートされた肉竿が喉奥で狭窄され、じゅぼじゅぼと淫らな吸引音が響き渡り、強烈な快感に脳裏がスパークする。
「あっ……イ、イクぅううっ！！！」
限界の限界を迎えたペニスの先端から、白濁した精液が凪子の口内にどぴゅりどぴゅりと吐き出された。陰嚢がびりびりと痺れて頭の中に白い閃光が奔る。
「ああっ、はぁああっ」
こんな射精は初めてだった。コンドームの味気ないゴムの中ではなく、温かで人の血の通った粘膜に発射する甘美な快感。精神の高揚と身体の満足感が一体化して幸福感が全身に満ち満ちる。
「すごい……いっぱい出たわね」
淫猥な人妻は精液をすべて飲み下すと、射精を終えたばかりの萎(しな)びつつあるペニスに舌を這わせる。
「あ……そんな……汚いですから」
「んっ……大丈夫だから」

献身的な人妻は、宣英の陰茎を口で掃除し終えると、射精を終えて少し気だるい身体を手のひらに泡立てたボディソープで丁寧に洗ってくれる。
（まさに……いたれりつくせりってやつだ……）
こんなふうに大切に扱われて嬉しくないわけはない。優しい人妻の気遣いにほっこりとしていると、シャワーで泡を洗い流した凪子が浴槽を指差した。
「ね。少しお風呂に浸って、ゆっくりしましょう」
「あ、はいっす」
宣英にしても一息くらいはつきたい気持ちだ。賛成すると凪子と連れ立って浴槽へと向かう。
「ここね、一応温泉なのよ。正しく言うと鉱泉を焚いてるんだけど」
湯船に浸かると、凪子が目を細めた。
「あ、そうなんですか」
「そう。ちょっとぬるぬるするでしょう？　炭酸ナトリウムが多いの。切り傷とか火傷に効くって言われてるわ」
「へぇ……この島、温泉も出るんですか。本当にいいところですね」
「そうね。外から来た人はみんなパラダイスだって言うわね」

「本当にパラダイスだと思います……凪子さんとこんなふうに一緒にお風呂に浸かれるだなんて……ねぇ、凪子さん、もっと近くに来てくださいっ」
凪子の身体を抱き寄せると首筋に唇を寄せた。
「あ……あんっ……」
手のひらに余るたわわな豊乳に、水中で手を伸ばすとそっと掴む。湯の中でより柔らかみを増した乳肉は、ふわふわとまるで蕩けるようだ。
ぷにぷにと揉んでいると、凪子が小さくわなないた。湯がちゃぷりと跳ねて水面が揺れる。
（いったい、何カップあるんだろう？）
女性のバストサイズなど皆目検討もつかないが、CやDといったサイズでないことはわかる。以前雑誌のグラビアで観た、Gカップという触れ込みの巨乳アイドルと同じくらいはあるのではないだろうか。
（なんでこんなに柔らかいんだろう……）
むちむちおっぱいはいくら触っても飽きのこない至高の感触だ。その軟らかさを存分に楽しむべく両手で揉みしだくと、たっぷんたっぷんとたわみ揺れて水面に大きな波紋を作った。

「あ……んふっ」
大きさだけではなく感度も相当に熟しているらしく、少し揉んだだけで凪子の唇はしどけなく半開きに開いた。恍惚に潤んだ眼の睫がふるふると揺れ、控えめなベージュ色の乳首は、まるで触って欲しいとばかりにピンと硬く勃っている。
「凪子さんのおっぱい、本当にすっごく柔らかいですね。こんな柔らかいおっぱい、初めて触りましたよ」
「やだわ、恥ずかしい。おばさんになると、張りがなくなって、どこもかしこも柔らかくなっちゃって、嫌だわ……」
「いいえ、そんなことないですよ、敏感でエッチな、最高な身体です。こんな素敵な身体を持ってるのに……半年も旦那さんに抱いてもらえてないだなんて勿体なさすぎますっ」
「仕方ないのよ。あの人は東京にいるから……」
「じゃあ、代わりに東京からき来た俺が、存分に気持ちよくさせちゃいますからっ！」
左手はそのまま胸を揉みしだきながら、もう片方の手を下へと滑らせると、茂みに指先を挿し込んだ。陰毛を掻き分けて指先で探り、ぽちりと小さな突起を見つけだす。
（よし、ここがクリトリスだよな）

「あっ……そこ……」
人差し指の指腹でくいっと撫で上げると、凪子は宣英にぎゅっと抱きついた。
「当たってます？」
「んっ……当たってるわ。ああっ……気持ちいい……」
宣英にしがみつきながら下腹の熱にため息を漏らす人妻の淫核を、指腹で捏ねくり回していると、次第に湯とは違ったとろみを持った液体が、じんわりと染み出してきた。ぬるぬると指先にまとわりつく愛液を指腹で掬っては、潤滑油にして花芯を撫でる。湯でいくら流されようとも、敏感な熟女の身体からは、愛液が次から次へと溢れだして滑りが枯れることはない。
（凪子さん……すっごく濡れてる。俺の指で感じてくれてるんだ）
一回りも年上の女性が、自らの腕の中で、快楽に咽び鳴く様子は愛らしく、いとおしさがこみ上げてくる。
「ダメ……ああん、吉川くんったら……上手……」
敏感な身体を持つ人妻は、頤を震わせながら眼をとろんと細めた。愉悦に満ちたその表情は淫靡で色っぽい。
「ねぇ、凪子さん。自分の手でするよりも、こうやって人の指でされたほうが、気持

ちいいですよね」
「わからないわ。自分の手でなんて……しないもの」
　凪子は、紅潮した頬を横に振った。
「嘘つかないでくださいよ。俺、昨日、偶然見ちゃったんですよ。凪子さんが……自分でしてるところ。ね、昨日、オナニーしてましたよね」
「やだ……ひどい。見てただなんて」
「偶然ですよ、偶然。ね、凪子さん、自分でするのと、されるの、どっちが気持ちいいですか？」
「ダメよ。そんなの……聞かないで」
「あれ、じゃあ、自分でするほうがいいってことかな、だったら、止めちゃいますよ」
「や……んっ、止めちゃ嫌ぁっ」
「じゃあ、正直になってくださいよ。昨日はオナニーをしてたって。ほら、ちゃんと言って」
「んっ、んんっ……してたわ」
　左右の襞を掻き分けて肉芽を弄くり回して尋ねると、とうとう凪子は観念したのか、消え入りそうな声で言った。

「凪子さん、いやらしいなぁ。昨日、オナニーしただけで飽き足らず、今日は俺のことを誘ったりしちゃって。どんだけ飢えてるんですか？」
「だって……やぁん、吉川くんの意地悪……」
凪子が恨めしげに宣英を睨んだ。とはいうものの、本気で怒っているわけではないのが、甘い声色からわかる。
「凪子さんのエッチなおま○こ、ほら、指だって、こんなに簡単に挿っちゃいますよ」
人差し指を肉豆にあてがったまま、中指をぬかるみの中心に挿し込むと、ぬるりと入り込んでしまった。四方から軟らかな肉壁がみちみちと指を締め付けてくる。
（うわぁ……中も柔らかい……）
淫らな人妻の膣内の肉は柔軟性に富んでいた。
指先が蕩けてしまいそうにぬるぬるとぬかるんでいながらも、きゅっと指を締め付けてくるのが心地いい。
この中にペニスを挿し込んだら、どれだけ気持ちのいいことだろう。粒だった壁肉の感触を確かめるように、中指を抜き差しすると、またも奥から熱い愛液が溢れてくる。
「すごいなぁ、凪子さん。びっしょびしょだ。ほら、お風呂の中でもぬるぬるしてる

のがわかる」
「……こんなことされるの久しぶりだから……はぁっ……」
自分で慰めてしまうほどに飢えている身体を、宣英の男指で弄られて、啜り泣きの声をあげる凪子がいとおしく、もっと感じさせてあげたいという欲望がこみ上げてくる。
「ああ、吉川くんの指、すごく気持ちがいいわ。どうしよう、わたし……声がでちゃう……」
「しっ。だめですよ。あんまり大きい声を出すと、周りに聞こえちゃいますよ。凪子さん、無防備なんだから……だから、俺にオナニーを覗かれたりしちゃうわけだし」
「んっ……くっ……やあっ、そのことは……もう言わないでぇ」
忍ぶ声もまたセクシーだ。必死に声を抑える表情が劣情をそそる。『オナニー』という単語を言われるのがよほどに恥ずかしいのか、宣英が口に出すたびに身体がぎゅっと強張り、膣がきゅっと締まる。
（こんなセクシーな奥さんに、寂しい思いをさせて……罪作りにも程があるよ！）
見知らぬ凪子の夫への嫉妬と羨み、そして幾ばくかの優越感が宣英の頭の中をぐるぐると駆け回る。

（今だけは……今だけは、凪子さんは俺のものなんだっ！）
もっと凪子の淫らな姿を網膜に焼き付けたい。腕の中の人妻の細いウエストを両手で掴むと、そのまま浴槽の縁へと持ち上げた。
「……ねぇ、凪子さんのいやらしいおま○こ、俺にじっくり見せてくださいっ」
「えっ……ダ、ダメよ。そんな、恥ずかしいわ……明るいし」
浴槽の中の宣英よりも、一段高いところに腰掛けた凪子の膝に手をかけると、そのまま左右に押し開く。目隠しの囲いがあるといっても、まだ日は高い。白日の下に裸体を晒すのは、さすがに凪子も抵抗があるらしく、慌てて中心を手で覆い隠した。
「いいじゃないですか。俺、凪子さんの身体をもっと見たいんですっ！　いやらしくて感じやすくて綺麗なこの身体を。ねぇ、お願いしますよ、凪子さん」
「ああんっ……もうっ、仕方ないんだからぁ……」
宣英の熱意が伝わったのか、凪子は観念したように股間を覆っていた手を外した。
「そう、股を開いてみてください。もっとよく見えるように」
「やだ、そんなにじろじろ見ないで頂戴。もう、吉川くんったら……純情そうな顔して、エッチなんだから」
凪子は恥じらいの表情を浮かべながらも、宣英の言うがままに、ゆっくりと股を開

いた。
（うわぁ……すごくよく見える……）
こんなに明るいところで女性器を見るのは初めてだった。恥ずかしがるので、実香とのセックスはいつも、電気を消して真っ暗な中でしていたからだ。
（こんなふうに……なってるんだ）
M字に開いた脚の間、少し濃い目の陰毛に覆われたふくふくと膨らんだ肉畝が、足の付け根にあった。その内側から薄紅色の小陰唇がちょろりとはみ出している。
手を伸ばしてつやつやと黒光りする縮れた陰毛を掻き分けると、ぷっくらと膨らんだ綿棒の先ほどの突起があった。小さいながらもフードが根元まで剥け、ピンと勃ちきってしまっている。
「凪子さんのここ、ツヤツヤしててすっごく綺麗です」
「もう……そんなにじっくり見ちゃいやよ」
「ダメです。凪子さんのスケベなおま〇こを、今日は思う存分可愛がらせてもらうんだ」
「あ……あんっ」
ぽっちりと勃起した肉芽に人差し指を伸ばし、下から掬い上げるように刺激すると、

凪子が細腰を小刻みに揺らした。
性感神経がぎゅっと詰まった快粒を、人差し指と中指とで挟んで左右にふるふると振ると、裂け目の間からにゅるりと透明の液体が溢れ出して、尻間へととろりと垂れ落ちる。
「こんなにいやらしい身体、よく半年間も男なしで我慢してましたね。毎晩、自分で慰めてたんですか？」
「あ、あんっ……だって……仕方ないじゃない……」
淫汁をたっぷりなすりつけては、すっかりコリコリに立ち上がった淫芯を擦ると、凪子はエロティックに腰をくねらせて、切ない声をあげる。
「もしかして、アルバイト募集っていうのも……最初からエッチ相手にするつもりで男子学生を探してたんじゃないですか？」
「んっ……そんなこと……しないわ……」
「本当かなぁ。ね、指なら自分でもできるけど、これは自分ではできませんよね」
宣英は熟した身体を持て余した人妻の両膝に手をかけて大きく割ると、その間の秘所へと顔を埋めた。
「あっ……あっ……そんなぁ……」

充血しきった淫豆を咥え込むと、口の中で飴玉を弄るように舌で舐め転がした。ぷーんと甘味と酸味の交じり合った濃厚なチーズのような香りが舌の上に広がる。

（ああっ、なんて美味しいんだろう。凪子さんのおま〇こ……）

もっと味わおうと、舌を差し込むとチーズの香りがさらに濃くなった。そのまま舌を出し入れすると、涎と愛液とが交じり合い、じゅぶじゅぶっと淫らな水音が響く。

「あっ……ああっ、吉川くんの舌、気持ちいいっ……はんっ、はぁんっ、そこ、そこぉおっ」

いくら指で夜な夜な慰めても、やはり限界はある。久方ぶりのクンニに、凪子は、襲いくる強烈な快感に耐えながらも身体全体を震わせている。

「ああ、恥ずかしいわ。わたし、こんな……舌でされたことなんか、もう何年も……」

「旦那さんは舐めてくれないんですか。じゃあ、俺が心行くまで舐めてあげますからっ！」

「あはぁうっ、すごい。感じ……感じちゃうぅっ」

唇全体で小陰唇ごとぱくりと咥え込むと、口の中でくちゅくちゅと舌を動かして肉芽を嬲る。小襞と大陰唇の間を舌表面をべちょりとくっつけて、大きく舐め上げると、凪子はひくひくと腰をひくつかせて身を悶えさせた。

クレヴァスからは、さっきよりも粘度が増した本気汁がだらだらと垂れて、噎せ返るような牝臭が辺りに漂っていく。外に漏れさせまいと、ぐっと抑えた吐息のセクシーな響きが耳朶をくすぐる。

「すごいですよ。俺の口周り、凪子さんのスケベ汁でびっちょびちょです」

「だって、吉川くんのお口が気持ちよすぎて、どんどん溢れてきちゃうのよぉっ」

欲情が燃え盛る身体を抑えきれないとでもいうふうに、凪子が身体を反らせ、ぐっと腰を浮かせて前へと突き出した。風呂の縁に浅く腰掛けているせいで、菫色（すみれ）の小穴までもが、無防備に白昼の光に晒される。

（うわ、お尻の穴までばっちり見えちゃってる！）

こんもりとかすかに盛り上がった菊門は、快感の波状を受けてやはりヒクヒクと呼吸するように蠢いていた。

むっちりと張った肉感的な尻をがしりと手で押さえ、むしゃぶりつくように顔を股間に埋めると、アナルから門渡りにかけてをべろりと大きく舐め上げる。

「ひゃ、あひゃううっ！」

クンニの快感さえも長らく忘れていた人妻にとって、アナル舐めの快感は大きすぎたようだった。まるで感電でもしたように身体をぶるぶると震わせてよがり狂う。

「凪子さん、アナルまで感じるだなんて、本当に恥ずかしい身体の持ち主ですね。もしもこうやって舐められるのが病みつきになったら、どうするんです？」
「や……だからダメ。んくっ……わたしの身体に、そんなこと、教え込まないで……」
「もう無理ですよ。知ってしまったんですから。ほら、素直に快感を受け入れて」
宣英は人差し指にたっぷりと唾を塗すと、そっと菊門に当てた。穴の周りをくるくると指を滑らせて愛撫しながら、再び秘部へと舌を滑らせる。
「う……くはぁっ、は……はぁんっ！」
さっきよりもまた一段と膨れ上がった勃豆を、親指でこねこねと弄くりながら、小陰唇を掻き分けて中指をズズッと出し入れする。
愉悦に弛緩したアナル口は、さっきよりもほぐれ、もっと宣英の指が欲しいとでもいうようにパクパクと収縮を繰り返す。
三点責めの快楽に、快感の最中の人妻はこぶしにした手をぎゅっと握り締め、足指もぐっと丸まらせて声にならない声を漏らした。
「ああっ、すごい！　中が締まって、すっげぇ指を締め付けてきますよ。それに腰もビクビクしちゃってる」
つぶつぶと小さな突起が粒立った膣壁が、両脇から宣英の中指を快刺激しながら、

しなやかな粘膜がねっとりとまとわりついてくる。
ちゅぷちゅぷと出し入れするたびに、膣道の締まりはいよいよキツさを増し、もしもこの複雑な構造の肉壷にペニスを挿れたら、と想像するだけで淫竿に血が通う。
「あ……もう、ダメ……イ、イっちゃいそう」
凪子が苦しそうに眉根を寄せて頭を激しく振った。弾みで髪留めが外れて豊かな黒髪がさらりと流れ落ちた。
今にも攫われてしまいそうな愉悦に耐え、八重歯で、ぎゅっと唇を噛み締めるさまは、息を飲むほどに色っぽい。清楚な人妻が乱れくるう様子は、背中にゾクゾクと怖気が奔る。
「いいですよ。俺の前で……俺の手で……俺の舌でイってくださいッ！」
「あ……は……ふぅんっ」
中指はヴァギナに差し入れたまま、クリトリスにぱくりと食らいついた。硬く尖らせた舌先を淫芯に当てて、顔ごと左右に激しく振りたくる。
ちゅぶちゅぶちゅばうっ。おびただしい量のラブジュースに唾が混じり合った潤滑液が宣英の頬と凪子の陰部との擦れ合いで激しく音を立てる。
「あ……イ、イクぅううううっ！！！」

ちゅるっ。ストローでジュースを啜るように淫豆を吸い込んだ瞬間、凪子は頤をがくがくと震わせて大きく仰け反った。膣道が、咥え込んだ宣英の指を離さないとばかりに、ぎゅっと収縮して奥へと蠕動する。

「ひゃはっ……はぁん。はぁふっ……」

絶頂を迎えまだ息も整わないままの凪子は、上体を前のめりにして宣英にぎゅっとしがみつくと、そのまま浴槽へと崩れ落ちた。

（な、なんて綺麗なんだろう）

凪子が絶頂する姿は、昨晩一度、見ていたはずだ。

あれはあれでいやらしくて淫靡だったが、自らの愛撫で気を遣る凪子の姿は、一層美しく淫らに見えた。

（……ああっ、凪子さんの胎内に……入れたいっ……）

さっき存分に射精したばかりだというのに、すでに肉棒はギンギンにおっ勃っている。指に残る凪子の膣内の具合を思い返すと、早く中に挿れたくて仕方がない。

「ああっ、もう我慢できません。凪子さん、挿入れさせてくださいっ」

「ええ、いいわっ。吉川くん。わたしも吉川くんのおちんちんが欲しい……」

宣英の腕の中で、ぐったりと胸にもたれかかって脱力している凪子が、淫猥な期待

に満ちた顔を上げた。
「はいっ……挿入れちゃいますっ!!」
ぎゅっと人妻の身体を抱き寄せて膝の上へと乗せると、向かい合った体勢で硬直した肉棒を掴み、ぬかるんだ裂け目にあてがった。
「あっ……」
ゆっくり腰を突き出すと、すでに一度絶頂を覚え、すっかり牡根を迎え入れる準備が整いきったヴァギナに、怒張した亀頭がゆっくりとめり込んでいく。
「ああっ、これが……凪子さんの胎内……」
いったんカリ首まで差し込むと、滾るように熱い粘膜が亀頭を包み込んだ。
みっちりと詰まった膣肉が全方向から亀頭に張り付くだけでなく、複雑に重なり合った肉襞が表面の快楽末梢神経をざわざわと刺激する。
「……ああ、貴方、ごめんなさい……」
凪子が熱に浮かされたように呟いた。そのくせ、湯の中、半分だけ自分自身にめり込んだペニスへと手を伸ばし、そのまま、腰をゆっくりと沈めてくる。
じゅぷじゅぷと膣道を掻き開きながら、根元まで埋まりきると、亀頭の先端にこつんと柔らかな壁が当たるのがわかった。裂け目の行き止まり。子宮口だ。

（うわっ……これが凪子さんの……胎内……）

本来ならば手を触れることさえ叶わないはずの人妻が腕の中にいて、さらには、宣英のペニスを受け入れてさえくれているのだ。感激に身体がわなないて狂おしいほどの欲情が込み上げてくる。

「ああ、凪子さんはすっごくスケベな奥さんだ……旦那さんを裏切って、俺のちんぽを自分から挿れちゃったりして」

「はぁん……だって……宣英くんのこと、ひと目見たときから……」

根元まで沈み込んだところで、接合面をぐりぐりと押し付け合いながら、どちらともなくぎゅっと抱き締め合うと、凪子が潤んだ瞳でじっと宣英を見つめて言った。

「俺……凪子さんに身体を……こういうふうに許してもらえて嬉しいですっ！」

「わたしも、宣英くんとこういうふうになれて……嬉しいの」

凪子が膝を浴槽の底につけたまま、脚の筋肉を使って、ゆっくりと上下運動を始めた。ピストンの手助けをするように、細腰に手を置くと、凪子はそれに応えるようにくねくねと悩ましくくねらせた。

年の功というのだろうか。さすがに腰の動きは熟練している。時にリズミカルに、そして時にはわざとリズムを変えては宣英の性感を刺激してくる。

それに加え、凪子の胎内といったら至福の感触だった。腰を引くたびに、むっちゅりと吸い付く膣壁の複雑な襞具合。いったいどうなっているのか、膣内でカリ首がひっかかり、えもしれぬ快感を呼び起こす。目の前で激しく揺れるのは豊かな熟肉の乳房。水滴が弾けて水面が激しく波打つ。

（ああっ、すごい……すごい気持ちがいいよっ！）

下半身の情動に耐えきれずに、凪子のみっちりと肉の詰まった尻ぺたを両手でぐっと掴むと自らも腰を突き上げた。

「ん……あぁんっ……っくぅっ」

子宮までも届く突き上げに、凪子が頤をぐっと仰け反らせて細い首筋を震わせる。

「はぁ……凪子さんのおま○この中……すっげぇキツい……」

肉孔の窄まりは狭く、ペニスをぎゅうぎゅうと容赦なく搾り込む。それでいて、肉棒を包み込む膣肉は蕩けるように柔らかく、ペニスと一体化してしまうのではないかと思えるほどのフィット感だ。

「はぁっ、ああっ、吉川くんのおちんちんが……気持ちよすぎてヘンになっちゃう！」

頬に後れ毛を張り付かせ、八重歯でぐっと唇を噛み締めた凪子の表情は扇情的で、宣英の欲情を一層掻き立てる。

目前で豊かな乳房が水滴を弾いてぷるんぷるんと揺れる。ちゃぷちゃぷと跳ねる湯がその腰使いの激しさを物語り、互いの身体に噴出した汗が蒸発し、辺り一面に噎せ返りそうな淫猥な香りを立ち昇らせていく。

どちらからともなく、唇を合わせると、湯の跳ねる音にまるで劣らない激しい水音を立てて唾液を送り合いながら舌を絡め合う。

「ね……お願い、吉川くん。後ろからも……」

唇が離れると、凪子が恥ずかしそうに宣英の耳元で囁いた。

「後ろから？　そんな破廉恥な体勢でヤラれたいんですか、凪子さんってば、本当にスケベだなぁ」

いつになく大胆なセリフが出てきたのは、人妻女将と日中の露天風呂で結ばれているという夢のようなシチュエーションのせいだろうか。まるでアダルトビデオの男優にでもなった気分で言うと、貪欲な身体を持つ人妻は、自らを恥じるように目を伏せて小さく頷いた。

その脇に手を差し込んで立ち上がらせると、自らは背後に回る。浴槽の縁に手をつかせると、立ったまま前のめりにした背中をぐっと下げた

身体全体のバランスに比べて大きめの尻がぐっと持ち上がり、細い腰との境目がき

ゆっと小さく窪む。
「うわぁ、すごくいい眺めですよ、凪子さん。そう、もうちょっと両足を開いて。俺のちんちんが挿りやすいように」
「ん……こう……これでいい……かしら」
凪子が肩幅ほどに脚を開くと、ぷりっと丸く膨らんだ尻の膨らみの中心部が曝け出された。
きゅっと締まった菫色の肛門と、綺麗に縮れた濃い目の陰毛、さっきまで宣英の男根をずっぽりと受け入れていた女陰は、しとどに垂れる愛液でぬらりと濡れ光っている。
「じゃあ、凪子さんがオネダリしたバックで挿入れちゃいますよ」
凪子の後ろから覆いかぶさると、硬くそそり立った肉茎の根元を手で押さえ、ぐぐっと腰を沈めた。じゅぽじゅぽと淫猥な音を立てて男根が女壷にめり込んでいく。
(う……わ。後ろからするとまた違った感触だ)
裏スジが、数の子のようにざらりとした膣天井に擦れる。
膣口の締まりは先ほどよりもさらにきつく、ぐっと奥まで抜き挿しすると、ぬめぬめとした液体が漏れてきて睾丸をしっとりと濡らしていく。

「は……ぁん。あぁっ、あひゃううっ、す、すごく、いいのぉおおっ！」
自分からリクエストしただけあり、凪子はこの体勢が好きなようだった。
柔らかに熟した臀肉をぐっと掴み、亀頭までも露出するほどに大きなストロークでピストンすると、背筋をぐっと反らせて髪を振り乱す。
「はうっ、こんな動物みたいな格好で、凪子さんが姦(や)られてるなんて、東京にいる旦那さんは、想像もしてませんよね。あぁ、本当に凪子さんは悪い女だ」
「あぁん……それは言わないでぇ……」
浮気妻に背後からペニスを突き刺して責めると、凪子はマゾヒズムを刺激されたのか、一層に腰を突き上げた。
「ぐっ、んんっ！　でも、俺にとってはいい女ですよ。淫乱でスケベな最高の女ですっ！」
下を向いているせいで、重力の赴くままに垂れてより一層ボリュームを増した見事な豊乳をぐっと掴むと、胎内を掻き回すように腰を左右へとずり動かした。
ぬちゅりと粘膜と粘膜が擦れる音が響いてまたも愛液が溢れ出し、亀頭へと熱い汁が降りかかる。
「あふっ、はぁうっ、ひゃうっ……あっ、あっ、あっ、ダメぇ。そんなふうに動かし

たら。イっちゃうからぁっ」
「いいですよ。イってくださいっ！」
両乳を手綱のように掴み、揉みしだきながら腰を打ち付けていると、凪子はもっと深く、もっと激しく、とねだるように腰を高く突き出しては悩ましげにくねらせる。
「あひっ、はぁうっ……ひゃぁあっ、くはぁあっ！」
もはや人妻であることの嗜みなど忘れ、高いよがり声をあげては、本能を剥き出しにして宣英の男根を熱望する。
「ほら、俺の……ちんちんで……アクメってくださいっ！」
「あ、んぁんんっ――――――っ！」
ひときわ大きな声で凪子がわなないたその瞬間、膣内がぐぐぐ、と内側に引き込むかのような蠕動を始めた。性欲に煮えたぎった精液をすべて搾り取るかのような狭窄に、宣英の脳髄に落雷を受けたかのような快感が奔る。
「あっ……俺……俺もイ、イキそうですっ」
「は……うっ……ぁ、吉川くん……大丈夫、今日は安全日だから……中……中でも……」
いまだ絶頂から冷めやらぬ凪子が、四肢を痙攣させて呻いた。その言葉を聞いた瞬

間に、脳裏で何かが弾け飛んだ。
「ぐっ……ぐわぁああっ」
人妻に中だしなんて人道に反した行為だ。そう理性ではわかっているものの、もう下半身は抑えが利かない。ぐっと子宮に打ち付けるように屹立を突き立てると、睾丸がぞわりと騒ぎ、先端からどくどくっと熱いスペルマが放たれた。
「ぐ……はぁっ……」
急激に脱力する身体を、振り返った凪子が受け止めてくれた。
「ありがとう、吉川くん……最高……だったわ」
ふたりで抱き合いながら湯船へと崩れ落ちる。
（はぁ……凪子さんと……こんなふうになっちゃうだなんて……）
最高のセックスを経験した感激に浸りながら顔を埋めた凪子の胸からは、とくんとくんという心臓の鼓動が聞こえた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

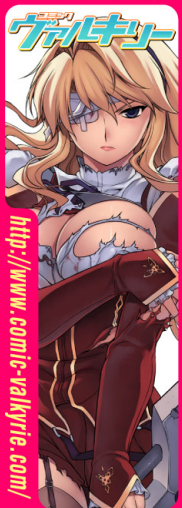
※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁でではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!